

# 主体的・協働的に、学びを深める児童の育成 ～キャリア教育を中心としたカリキュラム・マネジメントを通して～

熊本市立出水南小学校 教諭 藤本祥太

## 要 約

昨今、教科内容とともに学習の基盤となる資質・能力を育成することが求められている。本論文では外国語科の実践を挙げ、キャリア教育を中心としたカリキュラム・マネジメントのもと、主体的・協働的に、学びを深める児童の育成を目指すことにした。そのため、児童が解決したいと本気で思えるパフォーマンス課題の設定や、ルーブリックを用いた評価を明確に位置付けることで、児童の学びに向かう力を支えるようにした。

本研究を通して、課題と評価の両輪が明確に作用し合い、課題の解決に向けて自ら学び、豊かに学び合う児童の育成につながるということが明らかになった。

---

《キーワード》 外国語科 カリキュラム・マネジメント パフォーマンス課題  
ルーブリック 学習過程

---

## 1 主題設定の理由

### (1) 今日の教育的課題から

昨今、グローバル化や情報化が急激に進展する社会の中で、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先の見通しがますます難しくなっている。児童が将来就くことになる職業の在り方についても大きく変化することになると予測されており、求められる資質・能力の変化も考えられる。

平成29年度版の学習指導要領では、これからの未来、予測困難な社会を迎えるからこそ、「確かな学力、豊かな心、健やかな体を重視する『生きる力』をはぐくむことがますます重要になっている。」と示されており、「資質・能力」をベースに内容が3つの柱で整理されている。また、文部科学省は新たな学習評価の在り方として、パフォーマンス評価を位置付けた学習モデルについても示している。このような学びの実現に向けて、西岡（2019）は、教科の本質を中核としたオーセンティックな場面の中で「子どものパフォーマンスを引き出して実力を試す・様々な知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような複雑な問題」であるパフォーマンス課題を活用した授業デザインを提案している。つまり、主体的に問題解決を図る過程においての形成的評価が重要であり、「何を知っているか」という学びから「どのように問題解決を成し遂げるか」の学びへの転換で、教科の枠を越えた汎用的な力の育成が求められているのである。

「活動あって学びなし」と言われるように、楽しさだけを保障する授業では、学習は成立しない。全ての児童が課題に対して主体的・対話的に問題解決を図りながら、学びを深めていけるよう、教師は一人一人の可能性を生かすことを根底に据え、単元をデザインしていく必要がある。自ら学ぶ意欲やそのための資質・能力を高めていくことが、様々な情報や情報機器があふれている現代の社会において、最も強く求められているのである。

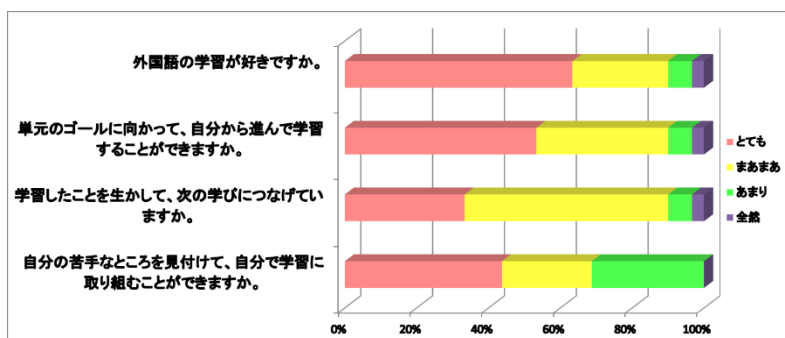
### (2) 児童の実態から

本学級には、明るく元気で素直な児童が多く、最高学年としての自覚とやりがいを持ちながら様々な活動に意欲的に取り組む様子が見られている。何事にも熱心に取り組むことができ、朝のボランティア活動や各種委員会活動等でも学校をリードする存在である。しかし一方で、言われたことには最

後まで熱心に取り組むものの、指示を待ってからしか行動できない傾向も見受けられる。同じ活動ばかりに取り組んだり、すぐ教師に尋ねるところから始まったりすることもある。

日々の授業にも、決められた課題に対して最後まで意欲的に取り組むことができる児童が多く、教科問わず互いに学び合う姿が多く見られている。中でも、外国語科の学習においては、笑顔で楽しみながら活動する様子が多く見られていたが、苦手だと感じている児童が発言を躊躇してしまう場面が見られたり、伝える相手を意識せずに発表したりすることも度々あった。また、自ら課題を見つけて学びを創り出すような姿が見られる児童が多くはなく、すぐに友達に頼ってそれ以上の答えを探さなくなるなど、生きて働く資質・能力としての定着が不十分であるため、主体的・協働的に問題解決を図る学びを目指すことが必要であると感じた。そのため、単元を通して「本物の」学びを単元全体に位置付け、ルーブリックを活用しながら学びの自己調整を図る学習を展開していくことで、課題を見付けたり克服したりしようとする力を全ての児童が身に付け、豊かに学び合い自ら学びとる意欲を育成することが必要だと考えた。

5月に実施した児童アンケートの結果は資料1のとおりである。外国語科の学習への関心や自ら進んで取り組むという項目については比較的高い結果となっているが、学び方に関する意識についての課題として、特に以下の2点が明らかとなった。



資料1 学習に関する実態調査結果 (5月)

【実態調査の結果から】

- ①自分の課題を見付けて学習に取り組むことができるかと回答している児童は一定数いるものの、「あまりできない」の回答も他の項目と比べて多く、二極化傾向にある。
- ②学習したことを次に生かすことができると回答している児童が少ない。

つまり、教科横断的な視点から学びを捉え直し、単元全体を通して児童が本気で取り組みたくなるような課題（パフォーマンス課題）と明確な基準で学びを振り返るルーブリックを位置付けた授業づくりを行うことで、主体的・協働的に、学びを深める児童の育成につながるのだと考えられる。

## 2 主題の分析

### ○「主体的・協働的に、学びを深める児童」とは

児童が「考えたい」「解決したい」と心から思える課題のもと、他者と協働して課題に取り組んだり、自らを動機づけたりしながら学び続けるための「資質・能力」を主体的に高めている姿と捉える。つまり、自ら課題を見付けて解決に向けた学びを粘り強く進めていく姿であると考えられる。

### ○「キャリア教育を中心としたカリキュラム・マネジメント」とは

児童が本気で取り組みたくなるパフォーマンス課題と単元のゴールとなる学びの明確な基準となるルーブリックを位置付けた単元を構成することで、児童自らが課題解決の見通しをもって粘り強く取り組むことのできる学びの過程であると捉える。さらに、キャリア教育を中心としたカリキュラム・マネジメントを通し、教科・領域間の相互作用を働かせながら試行錯誤を重ねられるようにすることで、児童それぞれの思いが高まり、全ての児童がよりよい解決に向かって学び続ける学びの過程となると考える。

### 3 研究の仮説

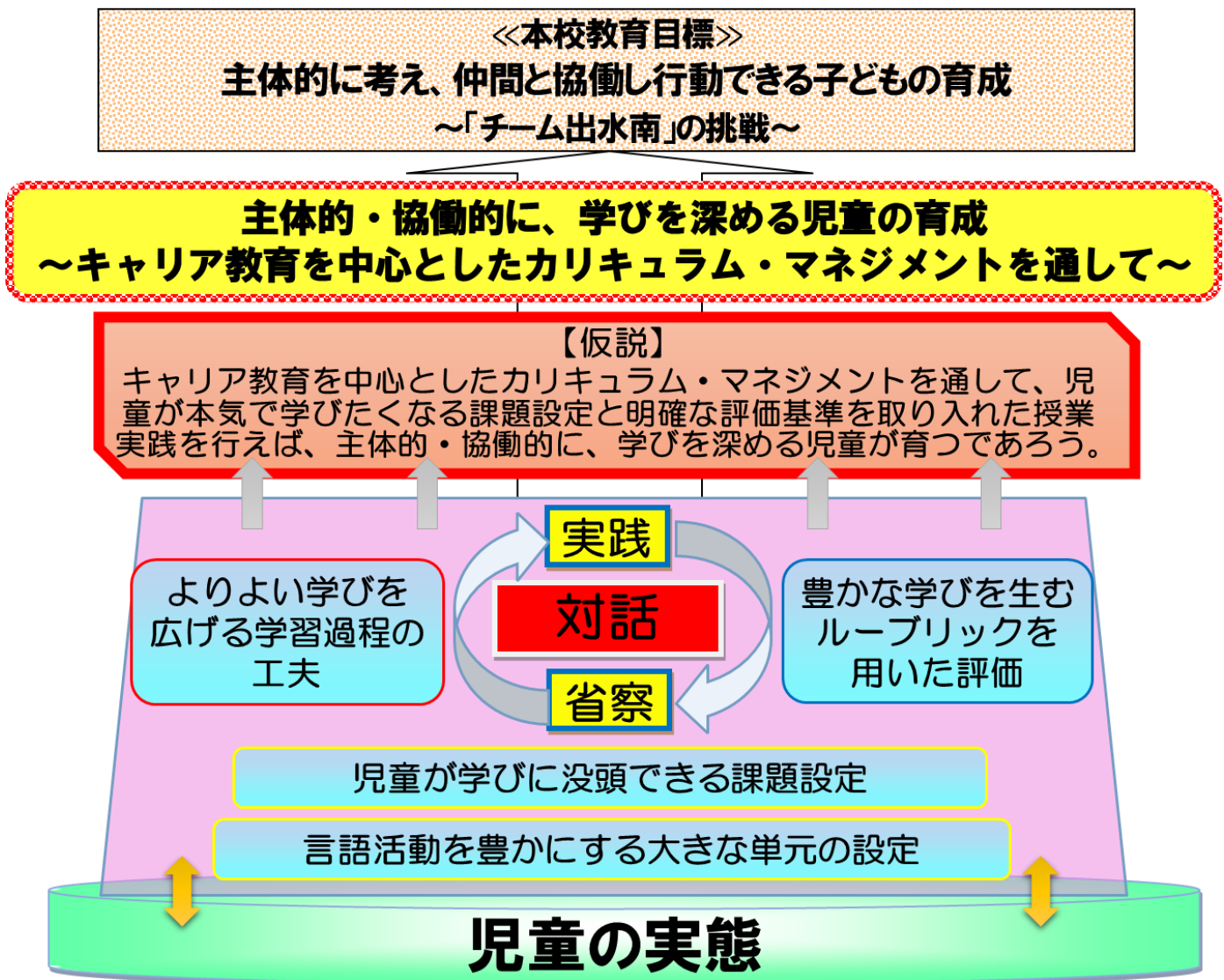
キャリア教育を中心としたカリキュラム・マネジメントを通して、児童が本気で学びたくなる課題設定と明確な評価基準を取り入れた授業実践を行えば、主体的・協働的に、学びを深める児童が育つであろう。

### 4 研究の視点

研究の仮説をより具体化して実践するために、研究の視点として、具体的に次の4つを設定する。

- (1) 言語活動を豊かにする大きな単元の設定
- (2) 児童が学びに没頭できる課題設定
- (3) よりよい学びを広げる学習過程の工夫
- (4) 豊かな学びを生むルーブリックを用いた評価

### 5 研究の構想



以上のような構想のもと、研究実践を進めてきた。これから述べる外国語科の実践において、それぞれの研究の視点についての検証を行っていく。

6 研究の実際

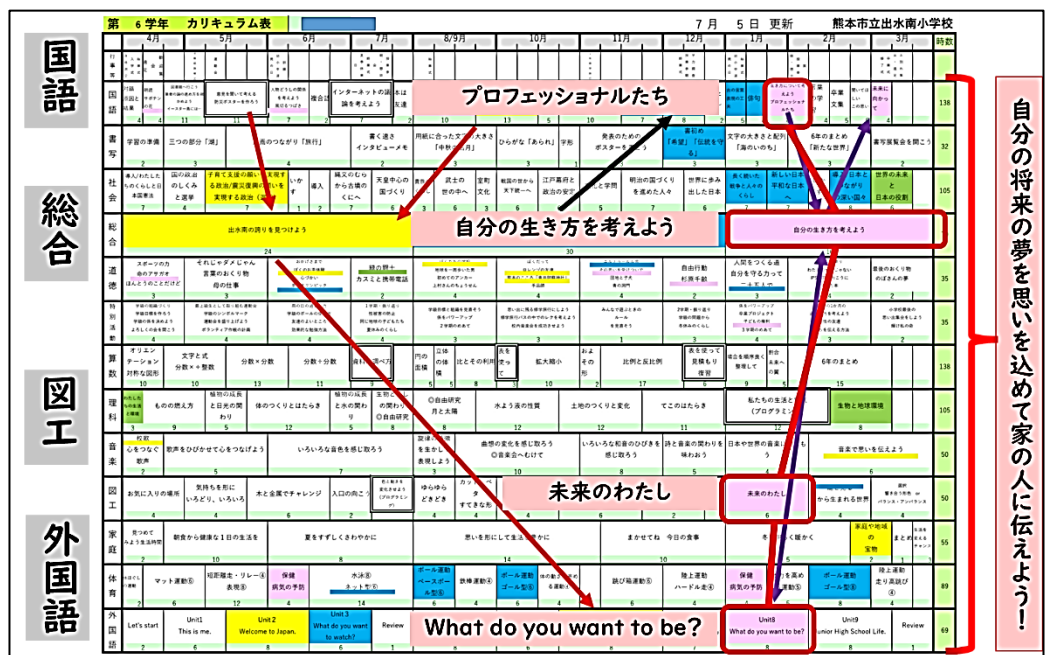
【対象】 6年4組 31人  
 外国語科 Unit8 What do you want to be? (Here We Go !6) 1月～2月実施

(1) 言語活動を豊かにする大きな単元の設定

小学校第6学年の3学期という、児童も教師も卒業という二文字を意識し始め、少しずつ将来のことを考え始める時期である。本校の年間計画においても、総合的な学習の時間のキャリア教育に関する内容や国語の「プロフェッショナルとは」という単元など、将来のことについて考えるきっかけとなる内容は多い。しかし、それらを単独のものとして扱っては、学びの深まり、充実につながりにくい。関連する内容だからこそ、それらを意図的に位置付け、ねらいをもった大きな単元を設定した上で授業に臨むことが必要なのである。

そこで、本校の年間計画をもとに、3学期の実践をカリキュラム・マネジメントの視点から捉え直し、それぞれのつながりを確認することにした(資料2)。確認する中で、図工の学習においても「将来のわたし」という単元で、紙粘土を使って自分の将来の姿を造り出すものがあることがわかったため、きちんとキャリア教育の学びと関連付けて取り組むこととした。また、6年生になってから行った国語の学習にも、「命」や「生きる」をテーマにしたものが多く、年間を通して話題にしながら学びを行ってきたため、それぞれが想起し直すことができるよう、改めて振り返った。

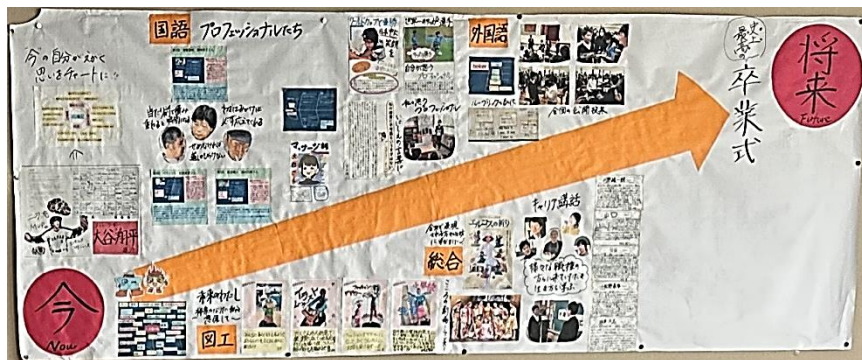
さらに、児童が大きな単元に本気で取り組みたいと思えるような導入の工夫も行った。本実践のタイミングで、アメリカのメジャーリーグで活躍されている大谷翔平選手から全国の各学校に贈られたグローブが本校にも届いた。莫大な金額をかけて



全国の学校に配付されたことや3つのグローブにはきちんと左右を入れる意図もあったことなどの情報を共有すると、「大谷選手はなぜわざわざ全国の学校にグローブを配ったのか」という児童の問いが生まれた。その問いについて、個人やグループで調べながら考えを整理していくと、大谷選手の生き方や昔つけられていた「マンダラチャート」についての多数の驚きと称賛の意見が出てきた。「私たちもやってみよう」という児童の願いもあり、友達とともに12歳の自分を改めて振り返ったり、「マンダラチャート」を書いて自分自身の将来について考えてみたりした(資料3)。この取組が後に外国語科で自分の思いを伝える土台になったのだと児童の姿から考えられる。



このように、キャリアについて考えていく大きな単元の導入では、大谷選手のグローブを用いて実践を行い、児童の「学びたい」「考えたい」という思いに火をつけることができた。先に示す資料4のとおり、大きな単元において、各教科等の関連やねらいを明確にして、実践に取り組んできたことで、それぞれの学びが切れることなく、「将来のこと」、「自分がどんな大人になりたいか」というテーマで思いをもって学びを深めていくことができるようになった。さらに、このような学びの積み重ねを応用紙に貼り付けて見える化しながら大きな単元を進めていくことで、過去の学びや学びの現在地を知ることができ、学びを実感しながら取り組む児童の姿が見られるようになった（資料5）。



資料5 見える化した大きな単元の学びの足跡

(2) 児童が学びに没頭できる課題設定

一時間ごとに、教師に教えられた内容を学び、それを繰り返していくような単元では、学びに必要感が生まれなため児童の意欲は高まりにくく、深まらない。特に、母国語ではない言語を使う外国語科ではなおさらである。外国語を話すことや聞くことへの抵抗感が強い児童にとって、単語を聞いたりフレーズを練習したりするような学習の積み重ねだけでは、さらに苦手意識を強くしてしまう。

そこで、児童が学びに没頭できるような課題を国語、図工、学活、総合的な学習の時間などの学びに関連させながら設定することで学びが深まり、思いのこもったゴールの姿となることを目指した。また、そのパフォーマンスを高めるためにルーブリックを活用しながら取り組むことも重要だと考えた。本単元の目標は「将来なりたい職業とその理由を伝えることができる」であり、教科横断的な視点を最大限に取り入れて行った本単元のパフォーマンス課題は「自分の将来の夢を思いを込めて、家の人に伝えよう」とした。自分の家の人に伝えるという相手意識とともに、小学校を卒業する今だからこそ、キャリアの学習とも関連させて思いが伝わる発表にするという目的意識を明確にしたことで、児童の意欲は格段に向上した。そこで「家の人に伝えるために、どんな学習にすればよいか」という投げかけを行うと、「もっとわかりやすく伝えないといけないから練習したい」

「思いを理由として表現するための言い方が知りたい」など、児童の意見が途切れることなく、次々と発せられるようになり、外国語科としての教科内容である言語事項の獲得や内容の深まりに単元通してつながるようになった。

このように設定した単元のゴールに向けて、本単元の学

指導と評価の計画（8時間取り扱い 本時6/8）				
課題	次	時	主たる学習活動	評価する内容と方法等
人自分の将来の夢について、思いを込めて家の	1	1	○オリエンテーション 単元のゴールの設定 ○様々な職業の言い方を知る。	【知】 観察、振り返りシート
	2	2	○様々な職業について伝え合う。	【知】 観察、振り返りシート
		3	○将来の夢とその理由を伝える言い方を知る。	【知】 観察、振り返りシート
	3	4	○自分の将来の夢とその理由を友達と伝え合う。	【思】 観察、動画、振り返りシート
		5	○自分の将来の夢とその理由をわかりやすく伝えられるよう、内容を付け加えて伝え合う。	【思】【主】 観察、振り返りシート
		6	●自分の将来の夢とその理由をさらにわかりやすく伝えられるよう、内容を修正して伝え合う。	【思】 観察、動画、振り返りシート
		7	○学級の友達と将来の夢について伝え合う。	【知】 観察、振り返りシート
4	8	○授業参観等の場で、家の人に自分の将来の夢への思いを伝える。	【思】【主】 観察、振り返りシート	

資料6 Unit 8 単元の指導と評価の計画



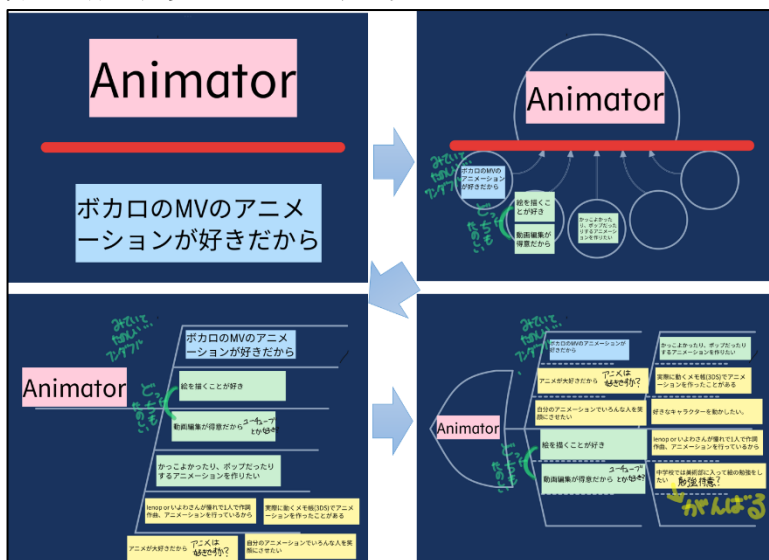
けでは十分でないということである。言語活動と言語活動の間をつなぐ柱として中間指導を位置づけ、児童自身の気づきから言語材料を引き出していくことが重要なのである（資料9）。児童の活動中に全体を一旦止め、モデリングと称して友達の姿を全体で共有しながら、「困ったことはないか」、「どこがよかったか」などと発問するようにすることで、「こういうところがすごい」「もっとこうすればうまくいく」などのような発言が児童から引き出されるようになった。言語活動を通して学びの深まりにつなげることで、言語材料は一層豊かになり、表現の変化が見られるようになった。何より、児童が言ったことをそのまま引き取るのではなく、どんな文脈の中で言おうとしているのかという、意図を汲み取りながらやり取りを繰り返すことで、中間指導が児童自ら学びとるきっかけとなっていくことを感じた。



資料9 児童の気づきを促す中間指導とその様子

このようにして、友達と協働しながら自身の表現を見直していくことで、より豊かな学びとなっていく。その中で、自らの思考を整理するために効果的なのが、思考ツールである。本学級では、年間を通して様々な教科等で思考ツールを活用してきたため、児童にとってそれは一つの思考整理のツールのようなものとなってきた。今回、それを生かし、単元中盤の自身の発表内容を創っていく段階において、ロイロノート上で思考ツールに書き出していくことにした。単元の中盤から回を重ねていくにつれて、思考ツールの種類や内容・表現などが少しずつ変わっていったことがわかる（資料10）。最初の思い付きの

ようなメモの段階から、友達とのやり取りを繰り返していく中で、「自分の内容をさらにパワーアップしていきたい」「どうしたらいいんだろう」という思いが児童の中に徐々に高まってくる。そこで、ループリックをもとにしながら、自らの言語材料を増やしていく姿が多く見られた。また、思考ツールを使うことで、どの順番で伝えるとより効果的であるか、何度も修正して試すこともでき、相手意識をもった思考を大きく働かせている姿を多く見ることができた。児童の話したいという思いに寄り沿いながら内容を一層充実させることができた。



資料10 一人の児童の思考ツールの変化（第3時～第6時）

#### (4) 豊かな学びを生むループリックを用いた評価

主体的・対話的で、深い学びの充実が求められ、授業の中での評価の重要性は近年特に大きくなっていくように感じる。個々の児童の学びの様子を捉える評価方法として、行動観察やポートフォ



リオ評価などがあるが、実際のコミュニケーション活動をルーブリックに従って評価するパフォーマンス評価は最も重要だと考えられる。いずれにしても、一方通行だけの評価で留まるべきではなく、児童自身の学びの質を高めるための評価という位置付けをもつことが大切であると考え。

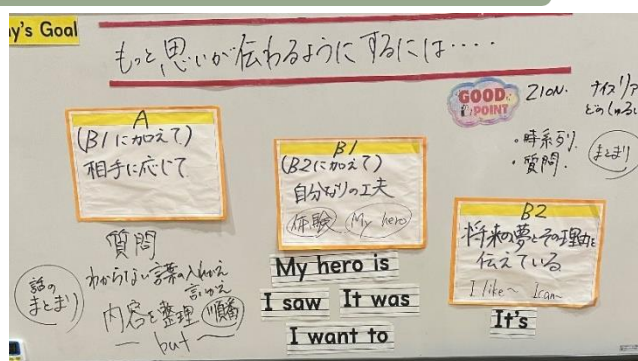
本単元のゴールに位置付けたパフォーマンス課題の達成に取り組む中で、「本当に相手に伝わる発表か」という点は曖昧で、児童の捉え方も様々である。今回、初めは、あえて何も基準を示さない状態でグループでの発表練習をするようにした。すると、自己流で挑戦する中で、「うまく伝わらなかった」という困りや「もっと伝えたい」という思いを本気で実感している児童の姿が見られるようになった。その瞬間を逃さず、「わかりやすく伝えるには、何が大切か」という投げかけを行うようにした。すると、児童の意見が複数出てくるため、それをもとに基準となる成果物のルーブリックを児童とともに話し合っ

て作成し、よりよい発表に向けて活用できるようにした(資料11)。このルーブリックは、評価規

A	B1	B2	C
(B1に加えて) 相手に応じて工夫し、自分の将来の夢とその理由をわかりやすく伝えている。	(B2に加えて) 自分で工夫して、相手に自分の将来の夢とその理由を伝えている。	自分の将来の夢とその理由を相手に伝えている。	先生や友達をサポートを受けて自分の将来の夢とその理由を伝えている。

準をベースに考え、児童の目指すべき姿をB基準とし、B基準の中を2段階に分けて作成した。また、このルーブリックの具体的姿については、第4時でB2、第5時にB1、第6時にAといった流れで、1時間ごとに段階的に考えるようにしたことで、表現が苦手な児童にとっても目指す基準が明確になり、主体的に学びとろうとする姿が多く見られるようになった(資料12)。このように、児童相互の姿からよりよい学びの形が生まれたことで、自らの学びを客観的に振り返って、単元を通してさらによい学びを生み出そうとする児童の姿が大きく増えた。

資料11 児童とともに作成した成果物のルーブリック



資料12 児童とともに考えたルーブリックの具体的姿

また、互いの発表を評価し合うことで、よりよい発表に向けて修正を重ねる活動を行った。相互評価をただ単に行うだけでは「よかったよ。」など漠然としたコメントだけで終わってしまうこともあり、十分な学びの深まりは期待しにくい。しかし、ルーブリックに沿って評価し合うことで、見るべき規準が明確になるため、互いの学びが深まるようになる。友達からの助言を受けて、自らの発表がより伝わるように工夫したり、さらに修正を加えたりと、試行錯誤する時間とすることができた(資料13)。ルーブリックを用いることで、これまで以上に協働的に取り組めるようになり、一人一人の表現に深まりが生まれ、学びが豊かになっていく様子が見られた。



☆ 1月30日(5)の自分の課題を決め、振り返ろう!

ここをがんばりたい☆My Goal☆

**もう少し詳しく理由を言えるようになりたい。**

名前			
評価	B1	B1	B1

☆今日の自分の姿をふりかえって  
ひとこと  
自己評価  
B1

☆今日の自分の姿をふりかえって  
ひとこと  
自己評価  
B1

☆今日の自分の姿をふりかえって  
ひとこと  
自己評価  
B1

☆ 2月2日(6)の自分の課題を決め、振り返ろう!

ここをがんばりたい☆My Goal☆

**相手がわかりやすいように内容を整理する**

資料13 コミュニケーションの相互評価の様子と記入した学習シート

## 7 成果と課題

### (1) 成果

○5月に実施したアンケートで課題として捉えていた2点について、卒業直前の3月に再度アンケート調査を行った。その結果から、進んで学習に取り組み、学びを改善しながら学習する姿が大きく伸びていることがわかる(資料14)。これは、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れて児童が本気で取り組みたいような必要感のある内容をパフォーマンス課題として設定し、単元ゴールの基準として児童とともに作成したルーブリックを活用した学びを行ったため、学びの方向性が明確になり、自ら進んで改善を繰り返しながら、よりよく学びとろうとする姿につながったのだと考えられる。

○大きな単元として取り組んだ外国語科の学習の中で、授業参観の場で最後のゴールとして行った「自分の将来の夢を家の人に伝える」という活動において、自分の成長や思いを表現するために、表情やジェスチャー、強弱、そして問い返しまでの多岐にわたる工夫を取り入れながら発表に取り組むなど、一人一人の学びの跡が随所に見えた。また、その日の自学ノートの中で児童が自発的に書いてきた振り返りの記述からも、思いを伝えた喜びがあふれている(資料15)。言語事項の習得とともに、それらを活用した表現力も大きく高まった。

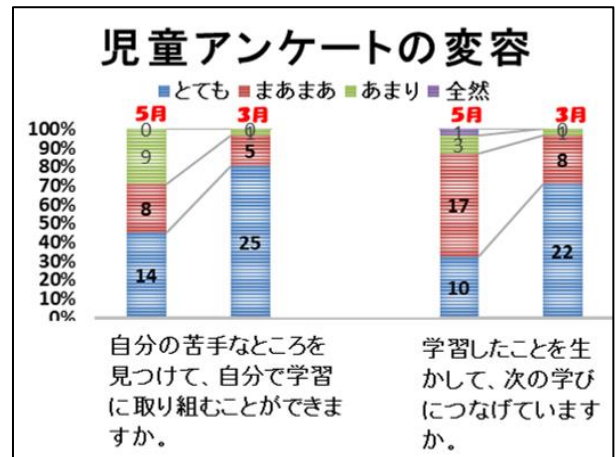
### (2) 課題

○パフォーマンス課題の達成に向けて、教師が教える内容と、児童自身に学びとってほしい内容をさらに精選し、児童自らが学びとっていく過程を想定した手立てを複数準備しておくことが必要である。自ら学び取る手立てとしてのICT端末の一層の活用やルーブリックの内容の整理等を行い、個別最適な学びを通して児童が豊かに学び合う環境づくりにもさらに努めていきたい。

○カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた授業改善の一つとして、本実践は効果的であったが、関連付けた学びを展開する上では実践の蓄積も必要である。様々な教科・領域等を関連付ける中で抜かすことのできない教科内容等の整理も行いながら、より豊かな学びを展開できるよう、今後も実践を継続していきたい。

## 8 参考文献

- 文部科学省(2018)．『小学校学習指導要領解説 外国語科編』
- 前田康裕(2020)．『まんがで知る未来への学び3』．さくら社
- 奈須正裕(2014)．『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』．ぎょうせい
- 奥村好美・西岡加名恵編著(2020)．『「逆向き設計」実践ガイドブック』．日本標準
- 田村知子(2018)．『実践・カリキュラムマネジメント』．ぎょうせい



資料14 児童アンケート結果の変容

今日は、本番の授業参観でいつもより緊張して最初は反応とかができなかったけど後からはちょっと肩が抜けていきました！何より保護者の方に自分の夢に向かってどれだけ本気なのかはもちろん伝えられたし、6の4で過ごしたことが大きく影響しているんだよ！って伝えられたのが嬉しかったです。それに、前まではタブレットを結構観ていたけど今回は見なくても伝えすぎて言葉が湧き出てきました！

資料15 授業参観後の児童の感想